

平成十九年度 秋の研修旅行報告Ⅰ

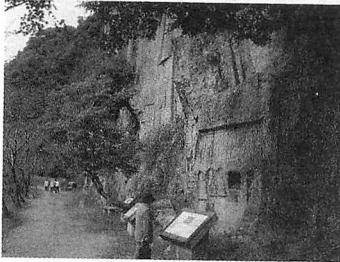
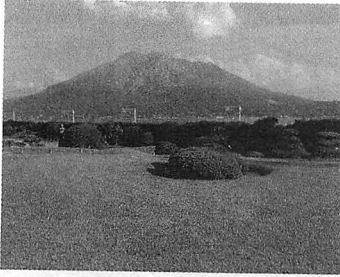
## 黎明園・仙巖園を訪ねて

吉田勝重

(会員 佐伯市女島)

私たち一行二十名は、秋の研修旅行として、鹿児島県の川辺町・鹿児島市・南九州市の史跡をめぐる一泊二日の研修に出発しました。

目的地は、島津藩主の別邸、仙巖園（磯公園）と近世・近代の遺物を集めた尚古集成館、鹿児島県指定文化



仙巖園と磨崖仏群

財である川辺町の清水磨崖石仏群、第二次世界大戦の特攻隊員を祀った特攻平和会館、特攻観音堂でした。

朝七時三十分、佐伯駅出発を出たバスは、一路十号線を南下。

途中、道の駅「はゆま」の由来や西南戦争での戦いで敗北した西郷軍が、官軍の包囲を逃れ可愛岳（えのだけ）を尾根伝いに南下し鹿児島に帰っていったという話。

五ヶ瀬川の河口付近、現在の川島町付近は昔は務志賀（むしかー無鹿町）とよばれ、豊薩戦争（耳川の戦い）の際、大友宗麟が陣をしき島津軍と対峙した所である事。さらに下った木城町高城は佐伯市十二代佐伯宗天惟教、十三代惟真、弟鎮忠、大友氏の田北鎮周、軍師角隅石宗が戦死した戦場である事などの説明がなされた。

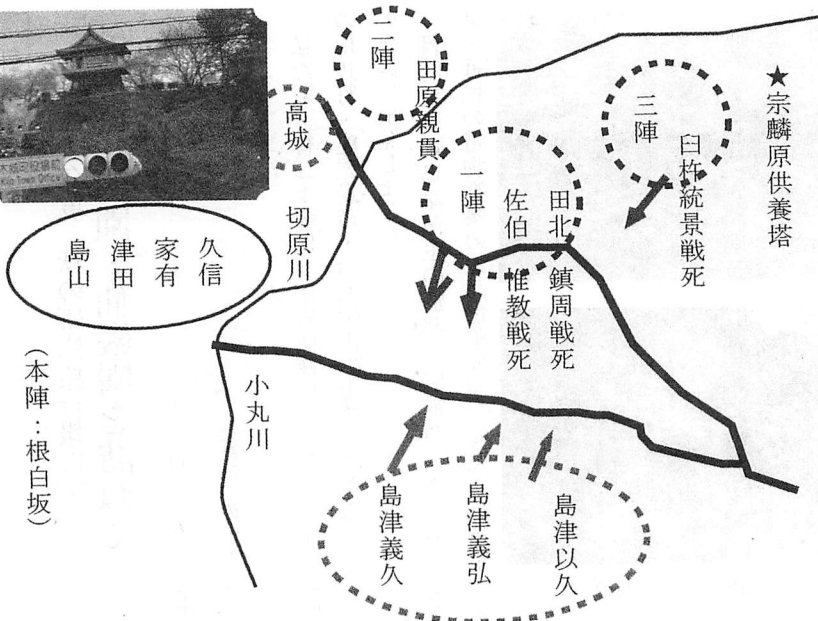
耳川合戦・高城の攻防戦は木城町と隣接する川南町南部一帯で、今から四百二十九年前の天正六年十一月に行われた。

現在、この一帯は宗麟原ともカンカン原とも呼ばれ、この戦いで亡くなった人の供養塔が建てられています。

高城で戦った島津軍の山田有信が、この地に両軍の供養塔を建てたそうです。現在の宗麟原供養塔です。



★宗麟原供養塔



史跡 宗麟原供養塔

天正六年（一五七八年）島津義久ガコノ地ニ大友宗麟ノ大軍ヲ破リ戦死者ガオビタダシカッタ。ソノトキ高城ヲ守ッタ島津ノ部将、山田新介有信ガ同十三年大友軍ノ犠牲者ノ霊ヲ慰メルタメコレヲ建テタモノデア。通称カンカン仏トイワレテイル方形ノ字石ノ各面ニ銘ガアリ蓮弁ヲ刻ンダ中台ノ上ニ六地藏ヲ浮彫シタ身部ノ六角塔ヲノセル

銘文

于時 天正十三年 大施主○謹奉訓誦大乘妙典一千部為戦亡各靈二月彼岸日  
源有信山田新介迷故三界滅悟故十方空本来無東西何処有南北

諸行無常是生滅法生滅々己寂滅為樂

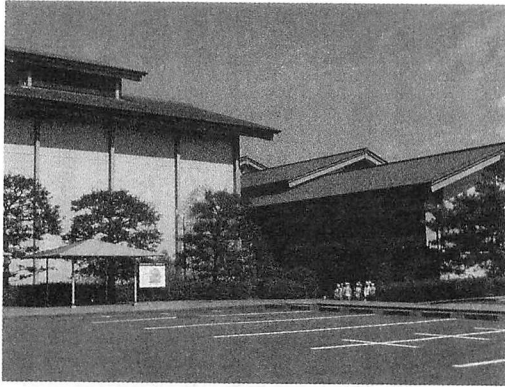
（本陣：根白坂）

久信 家有 津田 島山

## 一、黎明館を訪ねて

黎明館は、鹿児島県歴史資料センターが正式名称である。この黎明館のある場所は、鹿児島城、通称、鶴丸城と呼ばれる城跡の本丸跡に建設されたものである。

鹿児島城は、薩摩七十七万石という大きな藩の一つの城である。というのは、この薩摩藩には百一とも言われる外城（とじょう）があり、いざという時に使用できるように残されていたからである。



九州、四国、山陰、山陽、畿内の城が、元和元年の「一国一城令」により一つの藩に一つの城というように定められ、居城以外の城はすべて棄却されている。例外がこの薩摩藩と伊達藩である。

幕府からの一国一城令は、江戸幕府年寄衆が諸大名に通達したものが残されている。

「貴殿御分國中居城をば被<sub>レ</sub>二残置、其外之城者悉可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>破却一之旨上意候」（毛利四代実録考証）

「一国一城之外破却候様に被<sub>二</sub>仰出一候」

（鍋島勝茂譜考補）

また、寛永十二年（一六三五）六月に改正された武家諸法度第三条にも「新規之城郭構営堅禁止、居城之隍壘石垣以下敗壞之時、達<sub>二</sub>奉行所一可<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>其旨一也、櫓楼門等之分者、如<sub>二</sub>先規一可<sub>二</sub>修補一事」とある。

この内容は、「あたらしく城を構えたり営んだりすることとは堅く禁止する。藩主が住んでいる砦や堀、石垣を取り壊すときは、奉行所に届け許可を受けるものである。櫓や門については同じように届け修理するようにすること」と読み取れる。

このように、徳川政権になってからは、諸大名の軍事を削減する意味で、このような通達を出してきている。

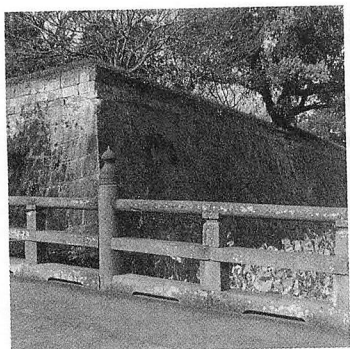
しかし、この薩摩藩の城は建物は壊されたものの、それ以外は残されたままになっている。いざ、戦いとなったときは建物を建てるだけで城として使えるという。

薩摩藩で、このような城が残ったのは、幕府との力関係もあつたと推察されるという。

その他の理由として、島津氏は「島津は九州一円を領地していたが、大隅・薩摩の二国となり、付属する家来の居場所が鹿兒島城下だけでは入りきれない」と言っているそうだ。そのため、この鹿兒島には外城として城跡が多く残っているそうである。

## 二、鹿兒島城（鶴丸城）

鹿兒島城は、鹿兒島湾を隔たる西北1Kmの城山の南麓に位置する。この鹿兒島城の後方、城山の山頂には、上山城と呼ばれる外城がある。



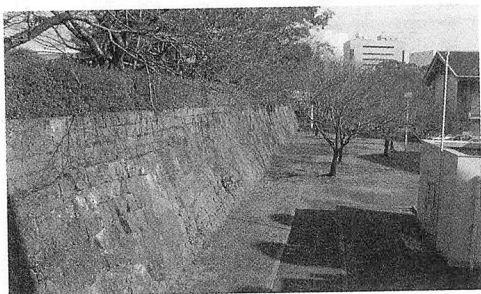
上山城は、南北朝の頃豊後の国緒方の土豪、上山氏が鹿兒島入りして作った城である。のち櫻島に移転している。島津氏との関係は如何に。

島津氏は、その上山

城の手前に館形式の城を作り住んでいた。この築城の際、十八代義弘は、軍略上の理由から海岸に近すぎると反対し、山間部の清水城を。十九代家久は、より近代的な発想や経済的な負担等から現在地を候補地として争ったという。

この角の石垣は、城の鬼門の位置にあることから、形が「入隅」の形を示していた。

この鹿兒島城の付近には、西南戦争の際の私学校跡などがある。



### 三、鹿児島県内の外城・聚珍寶庫

鹿児島県内には、一国一城令にも関わらず城が残されている。黎明館のある鹿児島城もその一つである。

今年の大河ドラマの主人公、天璋院篤姫も県立図書館のある二の丸御殿で、嘉永六年（一八五三）の二ヶ月間、十三代將軍徳川家定の御台所になるための準備で滞在したという。天璋院篤姫は、同じ鳥津家でも指宿の今和泉鳥津家の出身である。

では、薩摩藩の外城は、どこにどのように分布していたのか？

外城とは内城（鳥津家久居住地…現大竜小学校）以外の薩摩藩全体を百十余の行政区画に分けたものを言い、それぞれの行政区画に、半士半農の武士（衆中）を送り、その外城のある地域の軍事、行政を司らせていた。初めは有事に備えて配置していたが、安永・天明（一七七二〜一七八九）の頃になると、その必要性も薄れ、外城は郷と呼ばれるようになった。

それに併せて、その地域に住む半士半農の武士は「郷士」と呼ばれるようになる。

外城はそれぞれの行政区毎に軍事・行政権を持つてい

るが、薩摩藩の直轄地なのです。私領地には、それぞれ領主がいました。

薩摩藩の家臣団は、大別すると鹿児島城下に住む城下士と地方の郷士の二つに分けられる。

〈薩摩藩武士団の家格〉・・・幕末時の様子

藩主↓鳥津本家

一門↓鳥津氏の分家（加治木・垂水・重富・今泉）

一所持↓一つの領地を持つ家臣 三十家

一所持格↓ 十二家

寄合↓ 五十四家

寄合並↓ 十家

以上 上士

小番（馬廻り）↓ 七百六十家

新番 ↓ 二十四家

御小姓組（徒士）↓ 三千九十四家

与力・准士分（足軽）

以上下士

この黎明館の外には、この建物の基になる「聚珍寶庫碑」（しゅうちんほうこ）の記念碑が建っていました。

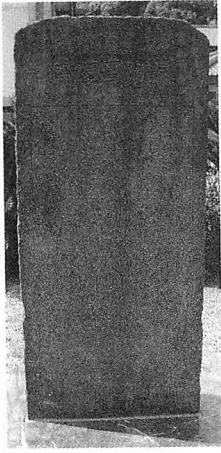
### 碑文のあらまし

天地がはじめて開け、太陽と月がこの世に現れて、動植物が世界に広がった。神農（中国伝説上の皇帝）が現れて、多くの植物を薬と毒に区別した。

私（島津重豪）はこれまで日本各地や海外の珍しい物を産を収集し、草木を栽培し、鳥や動物を飼育したが、それは自然界の真理を知ろうとしたためである。年月を重ねるうちに、屋敷の中に宝石、古代の印章や瓦、陶磁器などが満ちてきた。永年の心を込めた収集は、将来その散逸を残念に思う人がいるかもしれない。

そこで、宝物庫を荏原郡の別荘（高輪藩邸内）に建て、収集品のうち特に優れたものを選んで収めた。そして、宝物庫の名前を「聚珍」とした。

百年の後にこの収集品を所有するものは、どうか、散逸させることなく、永遠に保持してほしい。

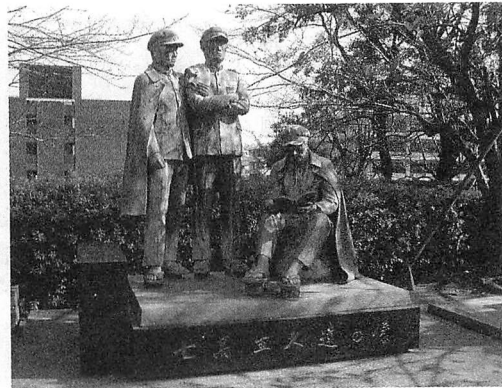


また、この鹿兒島城跡には七高生久遠の碑がある。

この鹿兒島城址は旧制高等学校「第七高等学校造士館」（鹿兒島大学）の跡地でもある。

明治十八年（一八八六）の中学校令により設立された官立の高等学校の一つで、一高から八高までであった。

一高（東京大学）、  
二高（東北大学）三  
高（京都大学）四校  
（金沢大学）五高



（熊本大学）六高（岡山大学）七高（鹿兒島大学）八高（名古屋大学）である。初めは十高までの計画であったが、九高指定で新潟大学と信州大学が対立し、九高指定は地名を用いるネームスクールに変わっていった。

この時七高生の白線帽、マント、高下駄の姿が像として残されている。

#### 四、仙巖園（磯庭園）を訪ねて

この「仙巖園」は、島津十九代藩主光久公が万治元年、ここに別邸として屋敷を構えたのが始まりという。

広さは一万五千坪あり、その後の島津当主に受け継がれてきている。別名「磯公園」とも呼ばれており、錦江湾に浮かぶ櫻島を目の前にすることができる絶景の場である。

入り口を入った所に大きな大砲の模型があり、続いて、反射炉跡、水力発電の記念碑、正門、錫門、庭園、御殿等がある。

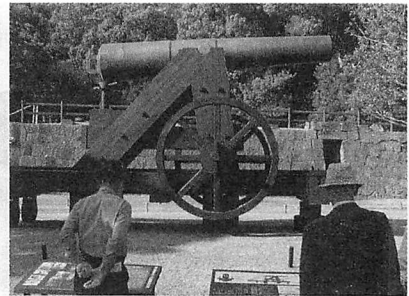
この仙巖園を順次紹介しよう。

##### ①百五十斤砲と反射炉

砲身の長さは四m五六cm中七四cm、重量八・三t、イチイガシ、ケヤキの台座に置かれた大きなものです。説明では、百五十ポンドの砲弾を三千mの遠くまでとばしたと



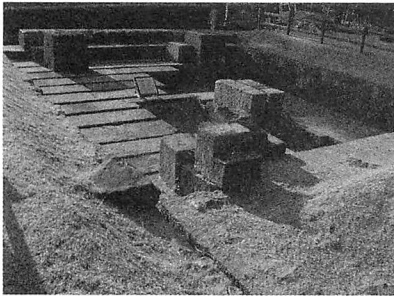
書かれている。



台座を含む長さは七m六五、五cm、巾一m九三cmとなっている。

この砲は、安政四年藩主、島津斉彬の命により、家来の市来四郎が作成し文久三年、薩英戦争の時二門使用されたという記録がある。この大砲を作った「反射炉跡」が後方に見える。

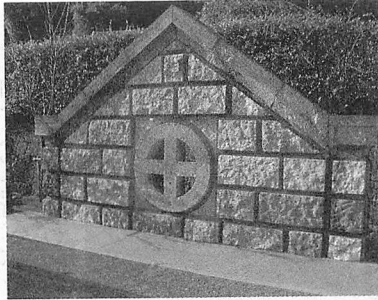
現在では耐火煉瓦の石組みが残されているだけですが、当時、現在の南九州市穎娃（えい）や志布志の砂鉄、宮崎県吉田の鉄鉱石を使って試行錯誤の上作られた国産の砲である。薩英戦争の際破壊されたそうです。純国産の大砲造り第一号と



言える。

砲造り第一号は佐賀藩ですが鉄は輸入品でした。溶鉱炉（反射炉）第一号は南部藩の釜石だった。

## ② 水天淵発電所記念碑

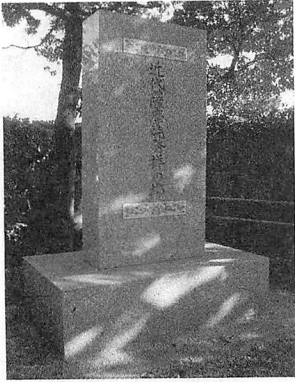


水天淵発電所は、島津家が経営していた山ヶ野金山に電力を供給するために、始良郡隼人町に建てられた石造りの発電所です。昭和五八年まで使用されていた。

## ③ 薩摩焼発祥の地碑

極東の宝石といわれ西欧諸国から「S A T U M A」と呼ばれ珍重された近代薩摩焼はこの地で誕生した。

藩主斉彬公は西欧の近代産業を導いた集成館を設置し軍艦製造等を中心とした



さまざまな産業を興し、海外との積極的な貿易を推進するため、この地にお庭窯薩摩焼を築き共に研究を重ね創製した、と碑文に記されている。

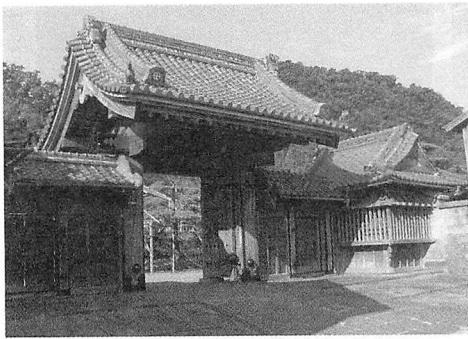
## ④ 仙巖園正門と錫門

この仙巖園は、島津藩主の別邸であったが明治四年の廃藩置県以後、二十九代忠義夫人達が居住することになり、明治二十一年以降は忠義本人も住むようになる。

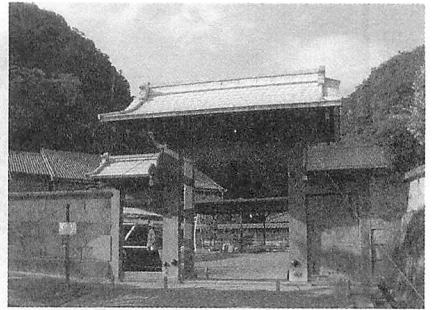
その後明治二十八年、鹿兒島の大王、大重伊三次に命じて建てさせた門であるという。用材は楠を使い家紋である丸十と五七の桐が彫り込まれている。

この本門の前を通り、左折すると錫門に至る。錫門は藩の特産品であった錫で屋根を葺いた朱漆塗りの門である。

錫瓦葺きの建造物としては、我が国唯一のもので、嘉永元年の庭地拡張までは仙巖園の正門と用







されていた。錫門は十九代光久の時に建てられたと伝えられている。

昔は藩主と世子だけが中央を通り、奥方や家老等は横の潜り戸を通っていたそうだ。

### ⑤ 御殿玄関と

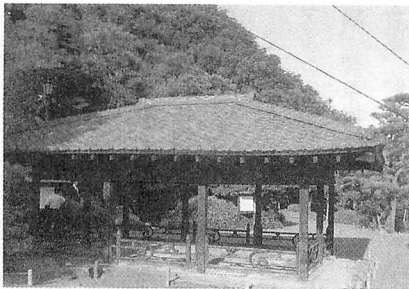
#### 獅子乗り大石灯籠

御殿は光久が御仮屋を建てたのが始まりと言われている。

明治十七年大改築が行われた(総工費三千五百三十五円二十一銭六厘)

現存する建物は、明治十七年当時の約二分の一の広さですが二十五部屋あまりある。

庭園の一角には獅子乗り大石灯籠がある。



明治十七年の改築時、御庭方の小田喜三次に作らせたそうです。獅子と火袋石は花倉仮屋跡のものを使い、笠石は磯海岸の防波堤に使われていた物を使用したもので大きさは畳八畳分もある。

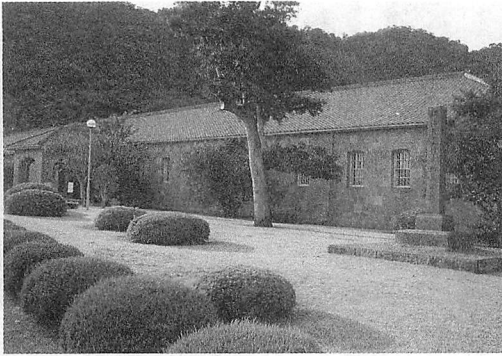
### ⑥ 望嶽楼と千尋巖

御殿の横には、築山のある池と光久公の時、琉球国王から贈られた「望嶽楼」と呼ばれる建物がある。この建物の床は、清朝初期の阿房宮の床瓦を模造したと伝えられる「搏(せん)」が二七三枚敷き詰められている。

御殿の裏山には、千尋岩と呼ばれる長さ十一mにも及ぶ文字を持つ碑がある。

## 五、尚古集成館

「尚古集成館」は、嘉永四年島津藩主になった斉彬公が、当時のアジアの諸情勢、特に中国清へのイギリスを初めとする西欧諸国の進出に危惧を覚え、富国強兵・殖産興業政策を推進し築いた工場群「集成館」の跡地で国の史跡文化財に指定されている。鉄砲大砲を鑄造する反射炉、反射炉に鉄を供給する溶鉱炉、砲身を穿つ鑽開台、蒸気機関の研究所、ガラス工場などがあり、



最盛期には千二百名もの人が働いていた。

斉彬の死後一時縮小され薩英戦争で焼失したが、忠義の手で復興された。明治四年集成館は官有となったが、続く西南戦争により多くの工場が焼失荒廃した。

跡に作られた洋式石造りの機械工場跡である。

この建物の中には、当時作成された物などが数多く残され、展示されている。

斉彬公の死後、一時縮小されたものの集成館事業は、忠義の代に復興され、磯地区を中心に鹿児島県一帯に拡張されていき、明治近代工業の礎として活用された。

この機械工場の周辺には鑄物工場、木工工場、製薬場、アルコール製造場、小道具細工場、金物小細工場、鍛冶場、製革場、製材場、弾丸仕上げ場、木炭・地金・木材倉庫、貯水池などがあり、ここで作られた大砲や砲弾は、島津斉興・斉彬が造営整備した砲台に設置された。砲台は次第に薩摩藩全体に配置されていた。

集成館事業では、砲台の他、各地に精糖工場、造船所、製鉄所、紡績所、火薬製造所等も作っている。

砲台跡―祇園洲、新波戸、弁天波戸、大門口、天保山

(以上鹿児島市)、脇本、阿久根、阿久根黒崎

(以上阿久根市)、片浦、秋目、久志、坊津

(以上南さつま市)、枕崎、知覧塩屋(以上枕

崎市)、穎娃別府(穎娃町)、川尻、山川福元、

指宿大山、山川成川(指宿市)、小根占、伊佐

現在残っているこの建物は、慶應元年集成館機械工場

敷、佐多（以上南大隅町）、内之浦（肝付町）、  
串木野、垂水、櫻島

※四斤野砲、四斤山砲、十二斤白砲を製造

精糖工場—瀬留、金久、須古、久慈（以上奄美大島）

造船所—瀬戸村、牛根、櫻島有村、磯（鹿児島）

※いろは丸、越通船（おっとせん）五隻、昇平

丸（琉球大砲船・昌平丸）、鳳瑞丸、万年丸、

大元丸、承天丸、雲行丸

注 越通船：小型帆船

製鉄所—鍋倉製鉄所（始良町、別名：鋼山製鉄所）

紡績所—中村紡績所、鹿児島紡績所

※郡元水車館（綿実油搾油所、機織所、精米所）

※田上水車館、永吉水車館、石谷水車館

火薬製造—滝之上火薬製造所、敷根火薬製造所、谷山

中之塩屋作硝場、花園精練所

反射炉一号炉

反射炉二号炉

写真撮影—印影鏡（銀板写真完成）

薩摩切子—中村製薬館にて薬びん作成、薩摩紅ガラス

（紅色切子）、綠色切子、藍

※色切子完成製造

鉛活字印刷 電信機製造 薩摩焼

ガス燈……仙巖園の鶴灯笼 等がある。

《資料：島津家系図》

源頼朝	—	1 忠久	—	2 忠時	—	3 久経	—	4 忠宗	—
		5 貞久	—	6 氏久	—	7 元久	—	8 久豊	—
		9 忠国	—	10 立久	—	11 忠昌	—	12 忠治	—
		13 忠隆	—	14 勝久	—	15 貴久	—	16 義久	—
		17 義弘	—	18 家久	—	19 光久	—	20 綱貴	—
		21 吉貴	—	22 継豊	—	23 宗信	—	24 重年	—
		25 重豪	—	26 斉信	—	27 斉興	—	28 斉彬	—
		斉敏	—	久光	—	29 忠義	—	30 忠重	—
		31 忠秀	—	32 修久					

これで第一日目の黎明館・仙巖園、尚古集成館の視察を終了した。次回報告では、川辺町の摩崖石仏群と知覧（南九州市）特攻平和会館の報告します。